

---

# ナポリタンとアールグレイ

ひろにか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナポリタンとアールグレイ

### 【Zコード】

Z5808P

### 【作者名】

ひろにか

### 【あらすじ】

最終回後、秋葉とレオパルドのケンカにうんざりするフォン博士。そこに更に彼を不機嫌にさせる人物・獅子堂神楽がやってきて、あらうことか話しかけてきた。それをきっかけに、老科学者は過去を振り返る・・・

## (前書き)

女の子がいつぱいいる作品にもかかわらず、爺さん田線とかありえないにもほどがあるお話（笑）。フォン博士の過去は公式ではないので誤解なきよう（笑）。同人誌作りで昔書いた小説を読み返していたのですが、この話が自分では一番好きかな。『そらかけ』小説はけつこう書いたんですけど、やっぱり一作目は一番趣味が出るよつです。

その日、老人は不機嫌だつた。

彼は元来、出無精な質。ましてや腰を痛めていたとなれば、尚更我が家でゆっくりと養生したいところだ。

しかし彼の終の住み家は、思春期の衝動に突き動かされた一人の少女の暴走により先だつて消失の憂き目に遭つてしまつていて。おかげで騒がしいこの場所に老人は滞在を余儀なくされていた。

この場所はレオパルド・コロニー内の一角のオープンカフェ。そのテーブルの一つに彼は腰掛けていた。

それはいい。問題は、カフェの面した路上で口論している二人いや、一人と一体だ。

獅子堂の三女はまあともかく、珍しく自室から出たあの八面体は何故こんなところにいるのだろう。

「枯れ葉キサマ、探してもらつた恩を感じる気持ちはないのか！」

「何よ！ ジャンプしたら、たまたまアタシがいただけなんでしょう！」

「くつ、挙げ足をとるとは・・・！ キサマは最低だ枯れ葉あ！」

「アンタにだけは言われたくないわ！」

・・・しかし、本当にうるさい。50メートル程度でもいいから、なんとか頑張つて移動しようか。

だがその前に折角注いだアールグレイを・・・などと考えていた老人に、声をかける者があつた。

「若い子たちは元氣でいいわねー」

「・・・神楽」

ナポリタンの皿をテーブルに置いて老人の隣の席に腰掛けたのは若い女だった。

老人は彼女をちらりと見、不機嫌そうに眉を寄せてそっぽを向く。

「暇ならアイツラを黙らせる。オマエの身内だろ？が」

女は老人の陰のある物言いを飄々とした笑みで受け流した。

それは老人のよく知る、この女特有の顔。

50年前と寸分違わぬそれに心が波打つのを感じていた老人は女の、

「うーん、それがアタシも身体の方がガタガタで。年はどりたくないものねえ」

などという返答に追い打ちをかけられて今度こそはつきりと渋面を浮かべる。

心にも無いことを、という言葉を老人はどうにか呑み込んだ。

ここで彼女の皮肉に反応しては、思つっぽである。

この女の狙いはそれなのだ。彼女とはそれなりに付き合いの長い老人は、そのあたりはよく心得ていた。

## ナポリタンとアールグレイ

老人と女が出会ったのは半世紀以上も前のことである。

今も少しも容姿の変わらぬ女と違い、当時の彼は若かつた（まあ当然の話なのが）。

その頃の老人　いや、青年と呼ぶべきか　は若いながら科学者として比類なき才能を發揮し、「天才」「神童」など幾多の賛辞を欲しいままにしていた。

故郷において彼と肩を並べる者は誰一人おらず、いささか退屈を覚えていた青年は余所のコロニーへ留学することを思いつく。

と言つても、別に競い合える好敵手を探すためなどではない。

己の頭脳に敵う者など存在しないと固く信じていた青年が、そんなことをするはずもなかつた。

本音は單なる暇潰し。長期の観光旅行程度のつもりだつたのだ。今でこそ閉じこもつて暮らしている彼だが、昔は外への興味も少しあつたわけだ。

ただ、留学という形にしたのは奨学金田当りであり、ケチの片鱗の方は既に示されていたと言えよう。

それはともかく、青年が故郷を後にしたのは偶然と氣まぐれの成せる業。どこまでも軽い気持ちで、彼はカーカウッド・コロニーへ降り立つた。

しかしそこには、彼の人生を大きく変える出会いが待っていた。  
その相手こそ彼女 獅子堂神楽に他ならない。

初めての敗北を「えたこの女に彼は幾度も再戦を挑んだが、ただの一度として勝利を収めることはできず。

負けるたびに雪辱を誓つたのだが、果たすことは遂に叶わなかつた。

宿敵ネルヴァアルとの決戦に臨んだ神楽は、帰つてこなかつたのだ。

それから50年が過ぎ、青年が年老い老人と呼べる頃合いとなつた今になつて、女は不意に戻つてきた。

若く美しい、あの頃と全く変わらぬ姿のままで。

なのに、彼には女を以前と同じように見ることは最早できなくなつていた。

かつて見上げていた年上の女性は、今や孫ほどの年の娘となつてしまつっていたのである。

時が流れ、それにつれて年をとる。

こちらは、当たり前のことをしている。変化しないこの女の方が規格外だというのに。

どうしてこちらが、置いていかれたような思いを味わねばならぬのか。

相変わらず、理不尽なやつだ。

のみならず、自分のこの感情を見透かしたうえでわざわざからかいに来るとは、性格の悪さまで変わらない。

老人は女を無視することに決めて、黙つてアールグレイに口をつける。

の方も、そんな老人を何も言わず眺めていた。

50年前と同じ、意地になる男の子を面白がる表情で。

それが余計に老人には面白くない。

こちらがあんなにもライバル視していたのに、コイツとき

たらいつも涼しい顔でそれを受け流す。完全に見くびられている・

・子ども扱いもいいところだ。

今となつては自分がはるかに年かさになつていてるのに、それでもこの扱いは変わらないといつのか。

そんな気持ちが沸き起つり、この半世紀で刻み込まれた老人の眉間のシワが更に深くなる。

そこへ。

「あーもう、いつまでやつてんのよアイツらー」

苛立ちを露にした少女の声に、女だけでなく老人も思わず顔を上げた。

「・・・獅子堂ナミ」  
「あらナミ、どしたの?」

呼びかけられた金髪の少女 ナミは「やー」の一人がいたことに気付いていなかつたようで（独り言にしては随分音量が大きかつた・・・というかあれは怒りが爆発しただけなのだ）、「こちらを見て露骨にイヤそうな顔をした。

紆余曲折を経て姉妹たちの元へ戻ることになつた彼女だったが、まだ神楽には少なからず苦手意識を持っているようである。老人からすれば、それも尤もな話だが。

「風音お姉ちゃんがバカ秋葉呼んでこいつて言つからわざわざ来たつてのに・・・アイツら、さつきからずつとああじやない。いつになつたら声かけられんのよ！」

憤りが神楽への氣後れを凌駕したのか、不満を吐き出すナミ。

その指示する先では、彼女の三番目の姉とそのパートナーたるローラーH.I.Eがいまだ舌戦を続けていた（正しくは言えば後者には舌は無いが、文法上はこの表現でいいだろう）。

確かにあの様子では、当分終わりそうにない。

「コレの決着を待つとなると、しばらくかかるわよー。懲りながら、止めに入るをお勧めするわ」

あくまで『神楽に言つ神楽に、ナミはゲンナリとした顔になる。

「・・・アレに割つて入れつての？」

「幸運を祈つてるわね」

あまりにあつさり言い切られ、これは食い下がつても無駄だと察したらしくナミは素直に引き下がつた。賢明な判断である（ただし老人の家を蒸発させてくれたのもこの少女なのだが。思春期の情動とはまつたくもって恐ろしい）。

渋々というのがひしひし伝わつてくる重い歩みながら、少女は一人、姉たちの方へと向かつていいく。

二人のやり取りが終わつたと見た老人は、手のカッピングに目を戻そうとした。  
が。

途中視界に入った予期せぬものに、思わず目が止まつてしまつ。

女が、穏やかな笑みを浮かべていた。

老人 フリードリッヒ・オットー・ノーブルマイン（フォンとしか呼ばれなくなつて久しいが）の知る限り、獅子堂神楽という女の笑みは、常に不敵で力強く、余裕に満ちたものだった。  
だが今の彼女のそれはまるで、ようやく歩けるようになつた幼い我が子を見守る母のような・・・

昔、自分に向いていたのはもつと・・・

ああ何だ、ボクは別に見ぐびられていたわけでも、子ども扱いされていたわけでもなかつたのか。

今さら気付くとは、ずいぶんと遠回りをしたものだ。

老人がふつゝと思わず笑みを溢すと、神楽は田ざとくそれを見つけ声をかけてきた。

「お、フォン。急に機嫌が良くなつたじゃない」

老人はもう不機嫌になることはなかつた。  
さらりとそれに応じる。

「いや何、オマエもしつかり婆さんになつたものだと思つてな」

それを聞いて、彼女が眉根を寄せた。それは流石に言われたくないことだったようだ。

「あら？ ちょっと聞こえなかつたわねえ。もう一度言つてくれ  
るかしら？」

その様子に老人は内心ほくそえむと、年上の貫禄をみせつけるよ  
う、余裕をたっぷり滲ませて言つてやつた。

「何だ神楽、耳が遠くなつたのか？」

自分の言葉にますます顔を歪める女、といつ若き日にはありえない光景に、「年をとるところのもの、悪い」とばかりではないようだな」と初めて思う。

彼は更に笑うとアールグレイの追加を煎れるために席を立つた。腰は少々痛むが、そんなものは些細なことだった。

## 終わり

以下余談。

「アンタたち、いつまで喰いてれば気が済むのよ！　いい加減にしろッテの……！」

響き渡ったナミの怒声に、歩きだそうとしていた老人が思わずバランスを崩して転び。

石畳に腰をしたたかに打ち付けて起き上がれなくなつて。

勝ち誇った笑みを浮かべた神楽に手を差し伸べられ。

「やはり年などるものではない・・・」と前言を撤回するその瞬間は。

あと4秒後に迫っていた。

本当に終わり

(後書き)

『そらかけ』では、秋葉と神楽さんが好きです。そこにフォン博士とレオパルトが加わると、昔なじみの爺さん婆さん+それぞれの孫って感じでたいそう和みます(笑)。最終話の博士の「神楽、オマエもだ」のあたりのやりとりはツボでした。・・・で、結局神楽さんはなんであんなにお苦いんでしょうね・・・?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5808p/>

ナポリタンとアールグレイ

2010年12月19日06時13分発行